

〈論文〉

小山市上石塚原坪の十九夜講

—講の変遷と和讃について—

清水 瑛理香

1. はじめに

栃木県小山市にある上石塚（旧上石塚村）は、辺り一面田畑が広がる農耕地帯だ。ここには無人の寺「等覚院」がある。観音堂と薬師堂があり、観音堂には木製の観音像の中に黄金の観音像が仕舞われた仏像が祀られている。その形状から「おはらごもり観音」と呼ばれており、ゆえに等覚院には安産と子授けの御利益がある。安産祈願の地であり、公民館のような地域住民が集まる中心地的な場でもある。この等覚院と上石塚に関しては、『小山市史』に「上石塚村内では、難産の人はでないといわれる」と書かれるような地域である^(注1)。

上石塚は3つの集落に分かれており、その1つが原という地区である。上石塚は大字にあたる区画で、原（原坪）は小字にあたる。2025年8月時点で、男性32人、女性36人が暮らしている。北側には思川の支流で、2015年9月に一級河川に制定された豊穂川という川が流れる。思川とは、JR両毛線の駅名や道の駅の名前にもなっており、小山市を代表する川である。西側には特別養護老人ホームの富士見荘、シャッターをはじめとする様々な建材を作る「文化シャッター株式会社」の工場があり、農業だけでなく工業施設や福祉施設も見られる。

本論で問題とするのは当地で受け継がれている十九夜講という民俗で

ある。十九夜講は月待ち^{つきま}という民俗のひとつだ。住民からは十九夜講とは呼ばれず、「十九夜様」、「十九夜の集まり」などと呼ばれている。女性たちが集まり、住民から「十九夜様」と呼ばれている石仏に和讃を唱えたり、当番の家や飲食店で食事をしたりする。石仏は一般的には十九夜塔などと呼ばれるものだ。北を向いて4つの石仏が建てられており、そのうち2つが十九夜塔である。塔の北にはアスファルトで舗装された道、その先には北西に田んぼ、北東に民家が建っている。東にも民家があり、南には畑がある。西にはゴミ集積所、さらに西には集落内の公民館的な役割を持つ「こくどうさま」と呼ばれる建物がある。和讃「十九夜様」に関しては現在、カセットテープと和紙に書かれた手書きのもの、活字で印刷されたものの3種類が残されている。

ところで月待ちというのは、特定の月の出を待って礼拝する講行事のことである。精進潔斎を必要とする伝承もあり、忌籠りのための行事と考えられている。飲食や話に興じるため、慰安も兼ねていたと思われる。この日には肥料の扱いを禁じる、男女の同衾を忌むなどの禁忌が伝えられているところもある。それぞれの月待ちには特定の仏や菩薩があてられており、十九夜は如意輪観音、二十三夜は勢至菩薩などが掛け軸や石仏に描かれている^(注2)。

十九夜講は十九夜の月の出を待つ月待ちで、多くは女性だけが集まって念仏を唱えたり、安産を祈ったりする講だ^(注3)。前記の通り、如意輪観音を本尊とすることが多く、掛け軸や十九夜塔にその姿が描かれ、講の際に拝まれる。十九夜講に関して様々な辞典類を見ると、「女人講」、「念仏講」、「如意輪観音」、「安産祈願」といった言葉がキーワードとなり得そう。

如意輪観音を祀ることが多いのは、それは血穢という女性特有の出血である月経や出産時の出血は穢れたものとみなされてきたことに由来するようだ。『日本民俗大辞典』の「血の池地獄」の項目によれば、如意輪観音は血の池地獄に墮とされた女性を助けるとされている。血の池地獄は『血盆経』という偽経に説かれる地獄のところで、出産や月経時の血の穢れゆえ、女性は死後この地獄に墮とされる。そして、地獄

図や十王図に、如意輪観音が血の池地獄の救世主として描かれる場合があるのだ^(注4)。

つまり、女性たちが安産を祈願したり、婦人病にならないように祈ったり、女性特有の悩みを解消しようとする講を行うべく、女性たちを地獄から救う如意輪観音に念仏を唱える形を取ったのだろう。

さて、ここで問題とする栃木県小山市上石塚原坪の十九夜講について書かれている文献は、現時点ではほとんど存在しない。そうしたなか、関正の『小山市の野仏【穂積地区】』^(注5)にはわずかながらでも紹介されており、貴重である。この穂積地区というのは小学校の学区を意味する。帳簿など講で使うものを除けば、この『小山市の野仏【穂積地区】』に十九夜塔の記録があること以外に、当該地域の十九夜講に纏わる記述は確認できていない。そこで、本稿では栃木県小山市上石塚原坪の十九夜講を報告するとともに、他の地域の十九夜講と比較し、その特色を示したい。

2. 月待ちの事例

月待ちは、日本各地で行われている。月待ちの中で代表的なものは、十七夜講、十九夜講、二十三夜講などとされている^(注6)。これは、僧侶が17日から23日の7日間、六観音と勢至菩薩を祀る、七夜待が関わっており、『日本石仏事典』にはどの仏がどの日に割り当てられているかを「文殊日礼」、「七七夜待之大事」、「七夜待本尊之事」をもとに、該当事項の執筆者である小花波平六が以下のようにまとめており、民間信仰として一般人が行うようになると、7日間、毎夜別の仏を祀ることは容易ではないため、この中から一夜、一尊を選んで行ったのだろうとしている^(注7)。

	文殊日礼	七七夜待 之大事	七夜待 本尊之事
十七日	千手観音	正観音	千手観音
十八日	正観音	千手観音	正観音
十九日	馬頭観音	馬頭観音	馬頭観音
二十日	十一面観音	十一面	十一面

二十一日	如意輪観音	准胝	准胝
二十二日	准提観音	如意輪	如意輪
二十三日	勢至菩薩	勢至	勢至

十九夜講では女人講が多く、如意輪観音が選ばれることが多い。なぜ女人講が多いかといえば、月経や出産の女性特有の出血が穢れているとされ、そんな女性たちを救うのが如意輪観音とされているからだ。飯田道夫は、どの日を選ぶかは個人、または個人の属する共同体の意志によるとしているが^(注8)、中上敬一は、現状、十九夜念仏信仰は月待ちと結びつける根拠がなく、十九夜は若い女性の厄年の十九歳と関わるとしている^(注9)。

『日本民俗大辞典』の「月待」の項目で十七夜講は代表格のひとつとして名前が挙げられるが、十七夜講について詳しい解説はない。十七夜講や十七夜待の項目が立てられている辞書・辞典の類も少ない。十八夜は臥し待ちの月、十九夜は寝待ちの月という別名があるのに対し、十七夜は早く昇るので立ち待ちの月という別名がある。月の出を待ち、礼拝するのであれば、十八夜講、十九夜講などよりも早い時間に行うのだろう。『日本石仏事典』によれば、千手観音や正観音を本尊とするが、茨城県下の十七夜塔には勢至菩薩の像が彫られているものがあり、また女人講中や女人中といった女人講であったとされる言葉が刻まれているものもあるようだ。「七夜待塔」の項目によれば、十七夜待ちの十を省略して七夜待と呼ぶこともあるようだ^(注10)。

二十三夜講は、「月待」の項目を確認すると、多くの辞典で二十三夜講が最も広く行われているといったことが書かれている。「二十三夜講」や「二十三夜待」で立項している辞典も多く、月待ちの中でも特に人気があることが窺える。二十三夜講を省略して三夜待、三夜講、三夜様などということもあるという。『日本民俗大辞典』には、千葉県印旛郡で11月に霜月三夜とよび、餅を搗いて祝った事例と、福島県西郷村の男性の月待講の例が挙げられている。勢至菩薩が本尊とされているが、他にも月読命や月天子などを祀ることもある^(注11)。

では、十九夜講にはどのような事例があるのか。『日本民俗大辞典』

には4つの事例が挙げられている。1つ目は長野県南佐久郡の事例で、3月の十九夜に集まったというものだ。いまは太陽暦を採用した影響で3月に限らなくなったようだ。2つ目は群馬県邑楽郡の例で、邑楽郡には十九夜堂や十九夜塔が多く、十九夜の夜に念仏を唱えて安産を祈るのだという。3つ目は奈良県で、既婚女性が出産の安全を祈る目的で行われているというものだ。最後は千葉県成田市周辺の事例である。ここでは十九夜講、観音講、遊山講など女人講が盛んで、十九夜講は若い女性、観音講は中年の主婦、遊山講は老人という年齢ごとに区別して行っているようだ。十九夜講に集まる女性たちは子供を産む年代の若い女性たちを中心に安産祈願をする^{とされている}。春や秋などに祈願するのだという。犬供養というものを行う例が多いようで、成田市では産死者が出た際にも十九夜講の構成員が中心となって、犬供養を行う例があるらしい^(注12)。

3. 原坪の十九夜講について

現在、栃木県小山市上石塚原坪の十九夜講に関する資料類は、和讃が書かれた和紙とプリント、和讃を唱えているときの音声を録音したカセットテープ、帳簿、十九夜塔、掛け軸がある。まずはこれらについて紹介する。

和讃は紙媒体のものとカセットテープが残されている。活字印刷されたプリントは2種類あり、A4サイズの無修正のもの、脱字、衍字が手書きで修正されたB5サイズのものである。和紙のものは縦が400ミリメートル、横が675ミリメートルのもので、縦は半分に折られて使われており、200ミリメートル、675ミリメートルの状態で見られている。カセットテープは、間違えて上書きしてしまったようで、途中で違う音声が入ってしまっているが、和讃が3回唱えられている。仏具「お鈴」のような金属音で女性たちのリズムを揃えている。

帳簿は3冊残っている。最も古いものは「マルゴノート株式会社（現（株）アルファファイズ）」製のA5サイズのノートだ。右開きでページが14枚ある。右上には穴が空けられており、青いビニール紐が結ばれている。目的はわからないがぶら下げられるようになっている。1969

年 8 月 29 日から 1977 年 2 月 9 日までの十九夜講の収入・支出が記されており、表紙にはこのように書かれている。

十九夜控

上石塚

原坪婦人部

昭和 44 年度秋新調

2 冊目は「(株) ジー・エム・ジー」社製の B5 サイズ、左開きのノートだ。ページは 30 枚あると裏表紙には書かれているが、28 枚しかなかった。1977 年 8 月 29 日から 1995 年 8 月 27 日までの記録で、15 ページ残して 3 冊目に移っている。「十九夜控」の前には「賞」の判子が赤いインクで押されていることを除き、表紙には同じことが書かれている。

賞十九夜控

上石塚

原坪婦人部

昭和 52 年度秋新調

3 冊目も B5 サイズで左開きの「コクヨ株式会社」のキャンパスノートだ。表紙に 40 枚あると書かれているが、28 枚しかページが残っていなかった。2 枚目以降が 12 枚分抜けているようだ。日付は連続しているので、ページを切ってから書いたようだ。1996 年 2 月 24 日から使われている。表紙は今まで通りで、次のように書かれている。

十九夜控

上石塚原坪婦人部

平成 8 年春新調

ページを残して 3 冊目に移った理由は、2 冊目の最終日、1995 年 8 月 27 日に決められたことがあり、それ以前の講の進め方から変化があったからだ。その決め事は 2 冊目の 1995 年 8 月 27 日のページと、3 冊目の表紙裏に書かれている。以下は 2 冊目に書かれていることである。

平成 7 年 8 月 27 日 新しく決った事

○ 十九夜は年 2 回やる

○ 前の相談はやめる

- 言次は当番が10日前に出す
- たのみ、お礼の人は言次が回ったら、当番の家にお金を持ってお願いに行く
- お金は出られなくてもかゝただけ出す
- 掛軸は当番の家にかける
- 当番は十九夜さまを家で3回拝む
- 十九夜さまの前で皆で3回拝む
- 御飯は、家であげたものを1重持つて行く
- 費用は当番にまかせる
(お店の最少限度とする)

以上

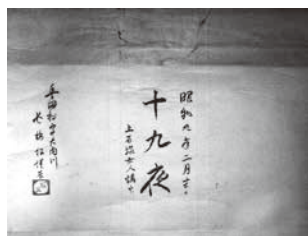
決まったことの1つ目にある「十九夜」は十九夜講のことを指す。2つ目の「前の相談」とは十九夜講の数日前に集まって、今度の講について話し合うことである。「言次」とは、いつ行くのかなどの知らせのことだ。4つ目の「たのみ」は出産を控えた女性が無事に産むことができるように祈願することで、「お礼」は無事に出産できたことを感謝するためのお礼である。7つ目の「十九夜さま」は掛け軸に描かれた如意輪観音のことで、8つ目の「十九夜さま」は十九夜塔のことである。7、8つ目で「拝む」は和讃を唱えることを指し、掛け軸と十九夜塔に向かって和讃を3回唱えるということである。

次に掛け軸を紹介する。帳簿の所で触



掛け軸

撮影:執筆者 2023年(以下同じ)



掛け軸背面

れたが、如意輪観音の絵が描かれている。背面上部には「昭和九年二月吉日 十九夜 上石塚女人講中」と書かれている。紺色の風呂敷に包まれた木箱の中に、蠟燭立てや線香と一緒に納められている。木箱の蓋の外側には「十九夜掛物 原坪用」、内側には「平成五年二月吉日」とある。箱だけ新しくしたようだ。

最後に、十九夜塔について記す。石仏が4つ、1列に並んでおり、右2つが十九夜塔である。左2つは庚申供養塔と光明真言供養塔で、これらは十九夜塔と違い取り立てて信仰されている様子はない。2つの十九夜塔のうち、左側のものから紹介する。大きさは幅が280ミリメートル、高



十九夜塔

さが830ミリメートル、奥行きが185ミリメートルである。正面には如意輪観音の座像、その下に「文化二乙丑年十九夜供養 九月吉日」と彫られており、向かっ

石塚村□□ 女人講中	【如意輪観音座像】十九夜供養	天保十己亥年 二月十九日	野脇都賀郡石塚村 原前女人講中	【如意輪観音座像】十九夜供養 九月吉日	文化二乙丑年
---------------	----------------	-----------------	--------------------	------------------------	--------

十九夜塔の彫刻内容

て左側の側面には「野脇都賀郡石塚村原前女人講中」と彫られている。右側のものは左側のものより大きい。幅は305ミリメートル、高さは1075ミリメートル、奥行きは300ミリメートルである。正面には如意輪観音の座像と「十九夜供養」の文字、右側面は「天保十己亥年二月十九日」、左側面には「石塚村□□女人講中」と彫られている。石塚村の下が2文字ほど読めなくなっているが、原坪または原前と書いてあったのではないだろうか。2022年に出版された『小山市の野仏【穂積地区】』でも読めないとしているため、3年前には既にこの部分

は風化してしまっていたようだ^(注13)。文化2年は1805年、天保10年は1839年なので、少なくとも約220年前には十九夜講が当地で行なわれていたようだ。

以上が道具などの説明である。以下は当地の十九夜講の行程や変遷について説明する。

まず、原坪の十九夜講は、2022年から中高年の女性6名で年1回、朝に行われている。かつては1世帯につき1人は必ず参加しなければならなかったが、強制力がなくなり、年々参加人数が少なくなっていった。現在の行程は、まず午前8時から9時ごろ、十九夜塔の前に集まる。メンバーが全員来るまで、先に来たメンバーたちは話に花を咲かせながら待つ。ご飯をひと口、半紙などに載せて十九夜塔に供える。無言で手を合わせ、御祈りする。当番から饅頭を受け取り、またしばらく話に興じる。満足するまで雑談をしたら、解散する。当番は事前に、饅頭の手配、供え物のご飯の用意をする。掛け軸を飾り、蠟燭を立て、和讃を唱えてから十九夜講に参加する。そして、帳簿や和讃が書かれた紙、カセットテープ、掛け軸を次の当番の人に渡して、その年の当番の仕事は終わる。近年は年に1度、十九夜塔の前に集まり、食事などはせず、30分ほどで解散している。しかし帳簿によると、1988年8月28日の十九夜講までは、年2回、当番の家に集まり行っていたようだ。商店街の店やスーパーマーケットなどで材料を買い、料理を作ったり、出前で寿司を注文したりしていたようだ。

1989年2月19日の講から当番の家で宴会ではなく、飲食店に行き、食事をするようになった。昼頃に十九夜塔の前に集まり、和讃を3回唱える。和讃を唱え終わった後、当番が重箱1段に詰めて持ってきたご飯から、ひと口ほど取り分けて十九夜塔に供える。重箱に残ったご飯を皆でひと口ずつ食べる。その後、饅頭を当番から受け取り、バスなどで飲食店に移動するという行程だ。新型コロナウイルスが流行する2020年まではこの形を取る。また、それまで年に2回行われていた十九夜講は、2005年8月7日の講から年1回になった。

2020年からは、新型コロナウイルスの感染を防止するため、飲食

店での食事や和讃を唱えることをしなくなる。2020年8月8日の講と2021年8月29日の講は、昼に十九夜塔の前に集まり、静かに祈る。十九夜塔にご飯を供え、当番から弁当と菓子を受け取って解散した。

2022年4月3日、2023年5月21日、2024年8月11日の講は、先に記した現在の行程の通りである。十九夜講以外に時間が使いやすいように朝に変更した。そして弁当はなくなり、饅頭だけになった。

2025年8月2日は前年と同様、朝に集まり饅頭が配られた。相違点は和讃を口に出して唱えたところだ。以前のように十九夜塔に向かって3回唱えていた。当日参加者が集まり、当番が準備をしながら、久々に十九夜様の歌までやるか、とB5判のプリントを皆に配った。新型コロナウイルスへの警戒が以前より薄まった今日、マスクを着けない人も増えている。そんな中で再び唱えることとなった。

4. 原坪の十九夜和讃

本稿で、栃木県小山市上石塚原坪の十九夜講を紹介する上で、和讃の問題を中心に据える。

前節で紹介したように、原坪の和讃は手書きの形と、活字印刷の形の2種類で書き起こされている。また活字のものも、無修正のA4判と修正したB5判がある。これら3種類には違いが少々見られるため、それぞれ以下に紹介しよう。

まず、和紙に書かれた和讃、「十九夜様」から紹介する。

十九夜様

きみよちらい

十九やの

みどをのまいを

ながむれば

にようらくによにん

があつまりて

くちにわねんぶつ

てにわづづ

ひよしをそろえてふりをつけ
 をいさめもをせしそのをりに
 十九夜さまわそれをみて
 ははとわらったそのこいわ
 てんちにひびきしみなさまよ
 ごかないあんぜんみのきとう
 よめもむすめもあんざんに
 まもらせたまいやかんぜをん
 なむあみだんぶつ
 なむあみだ

最後に、B5判の「十九夜さま」を紹介する。

十九夜さま

きみよちょうい十九夜の
 みどをのまいをながむれば
 にようらくによにんがあつまりて
 くちにはねんぶつてにわづつ
 ひよしをそろえてふりをつけ
 をいさめもをせしそのをりに
 十九夜さまわそれをみて
 ははとわらったそのこいわ
 てんちにひびきしみなさまよ
 ごかないあんぜんみのきとう
 よめもむすめもあんざんに
 まもらせたまいやかんぜをん
 なむあみだんぶつ
 なむあみだ

和紙に書かれたものには、「まもらせたまいかんぜをん」となっているが、プリントには「まもらせたまいやかんぜをん」と「や」が入っている。カセットテープで音声を確認すると、「や」は入っていたので、「まもらせたまいやかんぜをん」が正しいようだ。

この和讃がどんな内容なのか、意味が分かるように現代仮名遣いに直し、漢字をあてていきたい。そのために参考になり得そうなものを挙げていく。

まず、本来「え」と表記、発音すべきであろうところを、「い」としているところについてである。『真岡市史』の「念仏・和讃」の項に書かれていることによれば、「い」と「え」の区別のなさは栃木県特有の訛りだそうだ^(注14)。

次に、栃木県内の十九夜講和讃の中で、同じようなフレーズが使われる和讃を挙げる。佐野市の「十九夜様（洗濯場）」と、栃木市の「おいさみ」という和讃である。まずは、「十九夜様（洗濯場）」から紹介する^(注15)。

十九夜様（洗濯場）

婦命頂礼十九夜の 御堂の前を眺むれば 老若男女が集まりて
 おいさめ申す念仏は 家内安全身の祈祷 嫁も娘も安産に 守らせ給え観世音 一には大日如来様 二には日月薬師様 三には三世の諸仏様 四には信濃の善光寺 五には五池の如来様 六には六道の地藏様 七には七尊観世音 八には八幡大菩薩 九にはくりから不動様 十には当所の神仏 それを念ずる友がらは 十悪大難のがるべし 死して冥土へゆくときは 八万余仞の血の池をかすまな池と見て通る 女人救はんその為に 血の池地獄にお立ちあい 血の池のがるお念仏は 十九夜様の御本尊 火水あらためかうむりて さて又ごんぎをとり清め さてあさましや月のやく 十三十四の頃よりも 四十二三が身とめなり 月には七日のやくなれば 年には八十四日ある 今朝まですみしが 早にgori濁りし我が身をすすくには ほんちの下の井の水で 井の水くんですすぐべし すくいてこぼすも恐ろしや こぼせば大地が八つにわれ ほのぼの煙も立ち上り 山えこぼせば山の神 地の神荒神けがすなり 川ですすげば川下の 水神様も汚すなり 池ですすげば池奈落 両え浄土を汚すなり 天日でほすも恐ろしや 日輪様をけがすなり 夜干にほせば星明神 月輪様を汚すなり まだその外におそろしや ちりに交りて火にくばり 普賢ほけつやかまの神 三世の諸仏を汚すなり 南無あみ陀仏のお念仏を 三

べん申して桑の木の 桑の根本えこほすなり その血のともがも恐
ろしや 夜昼血の波わきかえる ひろさが八万余仟なり 深さが
八万余仟なり 中え落ちる罪人が 池の中え押し込まる 上えう
がみて空を見れば 上にはれん上の綱をはり あらあら恐し鬼達
が 黒がねちょうしを手を持ちて 我等がしゃばのやく水が の
みほせかいはせかしゃくする 如意輪様が現れて さほどの罪も
あるまいに我等がしゃばにありし時 遊びにもししお念仏 ほう
らい山の山となり ほうらい山の山あれて ひろしき蓮華が五本
立ち つぼみし蓮華が四本立ち 九品浄土えまえるには 開きし
れんげを笠にして つぼみしれんげを杖につき 法け経だら経み
のに来て 行かぬかなわぬ道なれば 雨の降る日も風の夜も 昼
夜にさべつ更になし ついたち九日十九日 二十九日のお念仏で
八万余仟の血の池を 申しうめたい南無あみだ 念仏からくる唐
糸は 三百八尋に又六尋 六尋の糸をからくりて 上なる舟えと
つみ上る 極楽浄土えのり出して 極楽浄土のこの門を 錢でも
金でもあかばこそ 念仏六字でさらとあけ 極楽浄土のまん中え
黄金の御堂が三つ立ち 上なる御堂をみ給えば 釈迦とだるまの
お立ちあい 下なる御堂を拝むれば 父と母との住む浄土 極楽
浄土えこぎ給え 申し浮みし南無あみだ

以上が栃木県佐野市の十九夜講和讃「十九夜様（洗濯場）」である。
この和讃を「洗濯場」と呼ぶ理由は、宮田登が述べるように、「血の染
みを洗いおとす力は女性だからこそ持つことができる力」という考えに
あると思われる^(注16)。この和讃と原坪の十九夜和讃が似ている部分は、
はじめの7フレーズである。比較対象とする原坪の和讃はB5判のもの
とする。「十九夜様（洗濯場）」の1フレーズ目は原坪の1行目、2フレ
ーズ目は2行目、3フレーズ目と3行目、5フレーズ目と10行目、6フレ
ーズ目と11行目、7フレーズ目と12行目、これらは酷似している。4フレ
ーズ目と6行目は前掲ほどではないが、「おいさめ」と「申す」の組み合
わせというところが似ているところだ。

次に栃木市の「おいさみ」を紹介する^(注17)。

きみょうちょうらい今日は ねんぶつこーじが一同で 十九夜お
堂を ながむれば 口ではおねんぶつ 手足では ひよしそらい
てふりをつけ 昔がたりのまねをして それを十九夜ごらんじて
ははとわらうそのこえは てんにもきこいしじにひびき よめも
むすめもあんざんに まもらせたまいやかんぜおん むらないあ
んぜんみのきとう なむあみだんぶつ なむあみだ

以降は、佐野市の「十九夜様（洗濯場）」と同様のものが続くので省略する。この「おいさみ」も、B5判と比較する。まず、「おいさみ」の1フレーズ目と原の和讃の1行目が似ている。3、4フレーズ目と2行目も酷似している。5、6、7フレーズ目と4、5行目にはいくつか重なるところがある。9つ目のフレーズと7行目は使う言葉は違うが、意味は同じである。10、11フレーズ目は8、9行目と似ており、12フレーズ目以降は10行目以降とそっくりである。

これらを参考に、栃木県小山市上石塚原坪の十九夜講和讃を漢字・仮名まじりに直してみれば、以下のようになろうか。

婦命頂礼十九夜の
御堂の前を眺むれば
老若女人が集まりて
口には念仏手には数珠
拍子を揃えて振りをつけ
お慰め申せしその折に
十九夜様はそれを見て
ははと笑ったその声は
天地に響き皆様よ
ご家内安全身の祈祷
嫁も娘も安産に
守らせ給えや観世音
南無阿弥陀仏
南無阿弥陀

「にようらく」は「ろうにゃく」が伝わる過程で、順序が入れ替わっ

てしまったものと推測する。「おいさめ」という言葉は一見すると「お諫め」と思われるが、「諫める」は禁止するや忠告するというような意味の語なので、文脈にそぐわない。そこで『日本国語大辞典』にあたると、「勇・慰」を使った「いさめる」が見つかった。「勇める・慰める」は「①はげます。力づける。元気づける。②慰める。慰めやわらげる。^(注18)」という意味である。これだけでは文脈に合っているとは言えないが、この「勇（慰）める」と関連した語に「神慰め」がある^(注19)。

かみーいさめ【神慰】『名』（「いさめ」は、力づけなぐさめること）

楽（がく）を奏して神の心をなぐさめること。神楽（かぐら）。

和讃の「口には念仏手には数珠拍子を揃えて振りをつけ」はまさしく、楽を奏して神（仏）の心を慰める様子である。用例も近世以降の資料が挙げられており、無理のない解釈である。

和讃のテンプレートなのか、主に如意輪観音を祀るのに、「観世音」や阿弥陀如来の念仏「南無阿弥陀仏」が出てきて、不思議な和讃になっている。

栃木県内の市町村史の民俗編に絞って確認し、その結果、和讃や念仏が書かれているものは、『小山市史』『佐野市史』『高根沢町史』『栃木市史』『藤岡町史』『真岡市史』『壬生町史』の7つだった。その中で、佐野市の和讃と栃木市の和讃はよく似ていたが、他の和讃に似ているものはなかった。もとはひとつの地域で唱えられていた和讃が広まった、と考えられる。そのため、以前は十九夜塔を囲むお堂があったのか、振りと呼べるような動きがあったのか、それとも別の地域から入ってきたものをそのまま唱えているだけで、これらの描写は関係ないのか、現時点ではわからない。

また、原坪の和讃と佐野市、栃木市の和讃を比較したとき、最も特徴的なことは原坪の和讃の短さだろう短い和讃を持つ地域から、伝わっていく上で付け足されたのか、長い和讃が伝わってくる過程または原坪で唱えられている過程で省略されたのかで、印象が変わってきそうである。

5. おわりに

ここまでが栃木県小山市上石塚原坪の十九夜講についての報告である。改めて簡潔にまとめる。

原坪の十九夜講では、如意輪観音が描かれた掛け軸と十九夜塔がある。1805年（文化2年）の十九夜塔が資料類で現存最古のものである。

帳簿は現在、3冊残されており、1969年から1977年の記録が書かれた最も古いノート、1977年から1995年まで書かれた2冊目、1996年から現在進行形で使われている新しいノートだ。この記録をもとに講の変遷を辿ると、まず1988年までは当番の家で十九夜講は行われていた。1989年からは十九夜塔に集合し、和讃を唱えたり、ご飯をお供えしたりしたら、飲食店に移動して食事をしていた。それまで年2回の開催であったが、2005年からは年1回となった。新型コロナウイルスが流行した2020年からは和讃を唱えなくなり、飲食店に行かなくなった。2022年からは講の構成員は6名になり、講を行う時間を昼から朝に動かした。2025年には新型コロナウイルスへの警戒が弱まり、再び和讃を唱えた。ライフスタイルの変化や疫病の流行によって、講の行程が変わっていくのがよくわかる。

和讃はカセットテープ、和紙に書かれたもの、活字印刷のものの3種類残されている。仮名遣いを直し、漢字をあてていくと、「婦命頂礼十九夜の 御堂の前を眺むれば 老若女人が集まりて 口には念仏手には数珠 拍子を揃えて振りをつけ お慰め申せしその折りに 十九夜様はそれを見て ははと笑ったその声は 天地に響き皆様よ ご家内安全身の祈祷 嫁も娘も安産に 守らせ給えや観世音 南無阿弥陀仏 南無阿弥陀」となる。

今回、原坪の十九夜講を取り上げようとしたきっかけのひとつは、難産の人は出ないという上石塚では、安産を祈願する十九夜講に何か特殊なことがあるのではないかという疑問からだった。結論としては、女性だけが集まり、如意輪観音に対して唱え言をして安産を祈願するという一般的な十九夜講と大きく変わらないということがわかる。しかし、他地域との違いは少なからずあるので、次に他地域との違いをまとめ、栃木県小山市上石塚原坪の十九夜講の特色を示したい。

まず講を構成する構成員に関することである。現在は6人の中高年女性たちで行われている。参加者が減少する以前は15人からと17人ほど

が参加していた。だが、ライフスタイルの変化などが理由で参加者が徐々に減っていったのだ。地域によっては、参加者の減少を男性も参加できるようにすることで対策するところもある。原坪の十九夜講も、1992年8月23日の帳簿に、「都合により出席できない場合は宴会に家族の人に限り男子でも良い事に決まりました」とある。しかし、男性参加者はおらず、強制参加させる力も徐々になくなり、現在の6人にまで減り、小規模で粛々と言うようになっていた。

少人数ということは、いつか誰も参加者がおらず、消滅してしまう可能性が高いと考えられる。人数が少なければ、あっという間に次の当番が回ってきてしまい、面倒だと思える人もいるだろう。しかし、少ない人数であるということは、融通が利きやすいという一面も持っているのではないだろうか。人が多ければ、その人の数だけ考え方がある。例えば、活動を昼から朝に変更するのも、参加者が多ければ多いほど、反対意見も多くなるのではないだろうか。また人数が多いと、集団の中での人間関係に偏りが出ることもある。少なければ、ひとまず、その場にいる面々とはまんべんなく関われるであろう。参加者が少ないというのは、寂しさを感じられるが、こういったメリットもあるのではないだろうか。

次に、和讃のことについてである。七五調で、比較的短いものとなっている。十九夜講和讃以外に目を向ければ、同じように短い和讃も見受けられた。しかし、栃木県内の市町村史に載る十九夜講和讃で、原坪のように短いものはなかった。これは大きな特色と言えるだろう。

この和讃の短さについて家族と話したことがある。そのとき父、清水英紀は、原の人たちは大雑把だと言った。長い和讃が面倒で短くした、ということも考えられなくない。確かに十九夜講も適当に済ませてしまっている節もあるだろう。そういう理由ではないと現時点では考えているが、和讃や十九夜講そのものを考える上で、住民の性格も無関係ではないのかもしれない。

以上が原坪の十九夜講の特色である。同じような言葉が出てくる和讃であっても、その後に長々と続く和讃もあれば、少ない言葉で終わる和讃もある。どうして、このような伝わり方をしたのか疑問のままである。

今後も継続して調査していきたい。

形を変えながら、少人数で現在まで続けている、栃木県小山市上石塚原坪の十九夜講。周囲は田畑が広がる農耕地帯で、人口も決して多くない。小さなコミュニティの中の、さらに狭い、たった6人のコミュニティとなった。年齢も全員が50歳を超え、最年長は78歳である。また強制力がなくなってから参加しなくなっていったのは若い女性が多く、子どもの人数も決して多くない。もしかすると、10年も経たずに当地の十九夜講が消滅する可能性もあるだろう。その前に調査できたことが最大の収穫である。

注

- (注1) 田島一利「第7章信仰 4 仏教的信仰」小山市史編さん委員会『小山市史 民俗編』1978年
- (注2) 紙谷威広「月待」『日本民俗大辞典 下』吉川弘文館 2000年
- (注3) 菊池健策「十九夜講」『日本民俗大辞典 上』吉川弘文館 1999年
- (注4) 高達奈緒美「血の池地獄」『日本民俗大辞典 下』吉川弘文館 2000年
- (注5) 関正『小山市の野仏【穂積地区】』2022年
- (注6) (注2)に同じ
- (注7) 小花波平六「七夜待塔」庚申懇話会『日本石仏事典』雄山閣 1975年
- (注8) 飯田道夫『日待・月待・庚申待』人文書院 1991年
- (注9) 中上敬一「茨城県の十九夜念仏供養塔」『茨城の民俗』四十四号 茨城民俗学会 2005年11月
- (注10) (注7)に同じ
- (注11) 菊池健策「二十三夜待」『日本民俗大辞典 下』吉川弘文館 2000年
- (注12) (注3)に同じ
- (注13) (注5)に同じ
- (注14) 田島一利「第8章信仰 第11節念仏・和讃」真岡市史編さん委員会『真岡市史 民俗編』1986年
- (注15) 坂本要「第6章信仰と年間行事 3 仏教民俗」佐野市史編さん委員会『佐野市史 民俗編』1975年

(注16) 宮田登『ヒメの民俗学』青土社 1987 年

(注17) 日向野徳久「第9章 3 念仏」栃木市史編さん委員会『栃木市史 民俗編』
1979 年

(注18) 「いさ・める【勇・慰】」『日本国語大辞典（第二版）』小学館 2001 年

(注19) 「かみ・いさめ【神慰】」『日本国語大辞典（第二版）』小学館 2001 年